

●春日部市民文化講座（第44回） 「茶の湯の四季」

◆日時：2024年5月29日(水) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

■茶の湯の四季

◆千利休のことば

きょうは、私たちが好きな茶の湯の世界が「四季」と深く関わっているということをお話できたらと思います。レジュメの冒頭に「千利休のことば」として「茶の湯とはただ湯を沸かし茶をたて 飲むばかりなり 本を知るべし」を挙げました。何じゃこれは、当たり前のことではないかと思われるかもしれませんが、実はこの一行の中に、日常性の当たり前の中に利休は芸術性、すなわち美しいものを求道する心を秘めているのですね。だから、茶の湯を嗜むようになると心が耕されて美しいものに対する感性が豊かになるのですね。だから茶の湯の稽古を通して、ぼくたちは何を感じとっているのかが大切なのです。講演を聞くだけではダメなのです。ですから、ぼくはこの講演会でもお菓子を出し、お茶を差し上げるようにしたのです。それは、本当の習い事というのは、身体に染みわたって「ああそうか」って感じ取らないとダメなのです。千利休がずうっ〜と訴え続けていることは、頭じゃなくて全人格的に湯を沸かしてお茶をたてて楽しもうよ、いいものだよなあ…ということをお稽古ごとにはぼくたちは味わうのですよ。

I. 茶の湯は四季を愛でる

レジュメのIは「茶の湯は四季を愛でる」ということですが、いったい四季を愛でる茶の湯というのは、いつ頃から始まったのかということです。ちょっと皆さんの頭で考えてみてくださいか……。まあ、千利休と言ったら何でも正解になります。茶の湯の世界で質問されたら「はい、それは千利休です」「千利休の心です」「千利休が考案しました」と答えれば殆どが正解です。ところが、千利休は初めの頃は「四季」に関してはそれほど明解ではないのです。それが、段々と茶室が設けられたり、茶の湯の道具が作られたりする中で作られていったのでしょうね。それが更に徳川の時代になり、家元制度などが作られて家元の好みが決まってくる中で「四季」を大切にするようになったと思うのです。

三千家をはじめとした家元制度というのは、17世紀から18世紀にかけて茶の湯をはじめさまざまなお稽古事が武士から町人の間に流行る中で確立され、そうした家元の好みの中で「四季」を愛でる文化を隆盛する力になったと思います。元禄15(1702)年12月14日に起こった赤穂浪士の討ち入りの時に討たれた吉良上野介は、その日に本所松坂町の屋敷で茶会を開いているのです。その時の名物として使われたのが、利休所持で利休が茶席に用いた「桂籠」という花入れなのです。今、あなたが12月に籠を使ったら、茶の湯を知っている人から「これ季節が違うわよ」と言われますね。でも、お茶人の権威というのは何よりも強いのです。だから、吉良上野介は、自分の所に千利休所持の「桂籠」がやってきたので、彼はこれを名物として12月の茶会に使ったのです。

◆茶の湯の道具の四季 炉と風炉……

茶の湯で「四季」を明確にする時に、「炉と風炉」という区別が出来てきたのです。いつからが「炉」で、いつからが「風炉」かということは、表千家では曖昧で、何月何日からということはありません。ぼくが最初に習ったのは、「炉」になるときは柚子が黄色く色づく頃、「風炉」になるときはモミの木の芽が出た頃だと教えられました。それくらい曖昧だったのです。今はちょうど炉から風炉に替わりましたでしょう。それをいつするのかというのは、それぞれのお師匠さんの感性によるのです。何月何日とは決まっていますが、それでも四季感があるのです。

◆茶の湯の四季 [高橋先生のレジュメより]

はじめに 千利休のことば——

「茶の湯とは ただ湯を沸かし茶をたて 飲むばかりなり 本を知るべし」

利休はこの言葉に茶の湯の日常的喫茶を避けるため「芸術」形式を重んじている。「芸術」という虚構性と生活文化の日常性の二つの要素が伴う事が大切であると考えた。

I. 茶の湯は四季を愛でる

1. みんなで考えよう
2. 茶の湯の道具の四季
 - 1) 炉と風炉
 - 2) 床の設え
 - 3) 花と花入れのこだわり
 - ・花入れ
 - ・籠
 - ・椿と槿(むくげ)

II. 茶室の設え 表千家家元の不審籠には冷房がない

1. 茶室の装い
 - 1) 花と花入れ(籠)
 - 2) 風炉と炉用の釜
 - 3) 炭点前の道具
2. 濃茶は「各服」と「まわし飲み」どちらが初めに行われたか
利休はキリスト教の聖餐式を知っていた
すなわち、パンとぶどう酒の共同飲食を神聖な礼儀であると学んでいた
3. 炉と風炉の時季をいつとするか

III. 人生の四季を想う

1. 人生と茶の湯
春夏秋冬
2. 認知症と茶の湯
形の変化があってもその人はそこに存在している
存在の神秘と神性
茶人の権威



II. 茶室の設え 表千家家元の不審菴には冷房がない

お家元の茶室には扇風機も暖房もないのです。これが千利休の心だというのですよ。「暑い時は暑いように、寒い時は寒いように」なのです。ぼくたちも子どもの時に、寒い時は手に息を吹きかけながらあかぎれで真っ赤な手だったじゃないですか。あれなんですよ。利休さんは、その世界をとっても大切にしていたのです。今は何でも便利であればいいでしょう、でも、便利であればいいという世界は必ず崩れますよ。必ず廃れます。必ず消えます。だから、お腹を空かして思いつき腹いっぱい食べたいなあ……と思っている時がいいのですよ。皆さんにもそういった時代があったじゃないですか。それがいいんです、とぼくは思っています。

◆茶室の装い

茶室の装いというもの、春夏秋冬というものがあるのです。そんな中で、千利休が何で二畳の茶室を造ったかといったら、やっぱり人の温もりでしょうね。二畳では一畳にお客さんがせいぜい三人でいっぱいでしょう、そして点前が一人の空間の中で、利休さんが求めていたのは人の温もりでしょう。それがだんだんと遠くに行っちゃって、便利さだけが先行してしまって、人の温もりが遠ざけられてしまったら、それは「茶の湯」とは言えないでしょうね。そして、「炭点前」が凄いですよ。灰の中に少しだけの火種を置いておき、そこに炭を継ぎ足していき、火が良い塩梅に熾る状態にするのですけれども、それを点前としてお客様の前で見せるのが「炭点前」ですが、この時に大切なのが「灰」です。この「灰」づくりが大変なのです。そして「炭点前」では、丹精込めた灰の上に炭を並べて湯が沸くようにするのですが、その炭の置き方が芸術なんです。ですから、皆さんが茶会に呼ばれて、「炭点前」からおもてなしを受けたとするならば、とんでもない世界にいるのです。炭が灰になるでしょう。その灰になる姿さえも愛でるのですよ。だから「四季」だけではなくて、時の変化を感じ取るのが「茶の湯」です。今、ぼくらはこうして健康にしていますが、それでもぼくたちの身体が刻々として変化しているんでということに気付くということも「茶の湯」の世界ではあります。「茶の湯」では、最初にお目にかかって、茶を楽しんで、「それでは」と帰るまでの間に凄く変化があるのです。それがたまたま嬉しいのです。

◆各服とまわし飲み

さて、「お茶」という時に「濃茶」が本物の「茶の湯」の世界なのです。きょう、皆さんに差し上げるのは「薄茶」でサラッとしたお茶です。これも「茶の湯」の世界ですが、「薄茶」ではなくドロツとした「濃茶」が本物の世界です。皆さんにお聞きますが、「各服(一人一碗)」と「まわし飲み」はいつから始まったと思いますか。「各服」と「まわし飲み」のどちらが先に行われていたのかということを確認している文献等はないのです。でも、日比屋了慶の家に逗留したルイス・デ・アルメイダが「茶の湯」のおもてなしを受けて、キリスト教の礼拝と「茶の湯」は似ているなど気が付くのです。キリスト教会では、「聖餐式(せいさんしき)」という儀式があつて、これは洗礼式と同じくらい大切な儀式なのです。それは、葡萄酒をいただき、パンをちぎって食べるという儀式です。似てるでしょう。日比屋了慶は千利久の友人でしたので、千利休という人が「聖餐式」を知っていたということは間違いがないのですよ。日比屋了慶の所で利休さん自身が見たかもしれないのです。これは証拠が無いので、高橋敏夫のおしゃべりになってしまうのですが、「千利休はお濃茶のヒントを、聖餐式からもらったんじゃないかなあ…」と思うのです。これは無いとはいえないと思うのです。ただ、これはただのおしゃべりですよ。

III. 人生の四季を想う 認知症と茶の湯

茶の湯の四季の後に、ぼくが考えたのが人生の四季です。人生にも春夏秋冬があるじゃないですか。おぎやあと生まれた赤ちゃんのときから、ぼくのように年寄りになるまでですね。これは先ほども申し上げましたように、時の変化なのです。歳とともに身体が変化していくということを感じ取ることも茶の湯と関わっていると思います。元氣ぶる必要はなし、若ぶる必要もありません。過度の化粧をする必要もないし、髪を染める必要もないと思います。杖が必要になったら堂々と杖を使ってください。それが生きるということの意味を考えることなのです。茶の湯では、生きるということの意味をいつも問われているのです。お稽古の中で、人のお点前を見ながら感ずるところがあるのですよ。お稽古を始めたばかりの人でも、人のお点前を見て感じる場所があるのです。人の振り見て我が振り直せではありませんが、それが茶の湯の原点ですよ。

これから感動的なお話をしたいと思います。ぼくの茶の湯の先生は、表千家直門の久田宗匠のお弟子さんで横山梯子先生といいます。この横山先生が認知症になって、ご自身でもある時期までは、自分が病気であるということに認識されていたのです。その頃は、ご自身が生けた花の名前さえも忘れ、茶道具の扱い方さえも忘れてしまっていました。そういう時が、ぼくたちにもやがてやってくるのですよ。これは脳の病いで避けられないのです。横山先生もそうになりました。そんな時に、先生がぼくたちにこう言ったのです。「私の茶会に出席してくださいませんか」って。ぼくはびびりましたが、「喜んで伺います」と言い、全員が出席することになりました。

お茶会には、表千家御用達の懐石料理の柿傳さんが来てくれて素敵なお料理を出してくれました。先生は、ご自分でおっしゃったとおりに茶会を始められました。でも、先生は認知症の病いのために、ことごとくお点前ができないのですよ。そのできないということが分かっているから「これでよかったかしら？」と私たち弟子たちに所作を一つひとつ聞きながら、全部お一人でなさったのです。ぼくはその時に泣いていました。本物のお茶会に出合ったことに感動して泣いていました。

◆むすび 茶の湯の日常性と芸術性の春夏秋冬

1. 千利休の遺偈(ゆいげ)

レジュメの「おわりに」で千利休の遺偈を載せました。何度か、この講座の中でもご覧いただいたのですが、きょう皆さんに覚えておいて欲しいのは、最後の「天に抛(なげう)つ(我が身を天に抛つ)」という言葉です。「抛つ」という言葉は任せる、委ねるという意味の言葉で、自分の身は天に任せるということなのです。千利休は秀吉から「お前なんか死んでしまえ」と言われて、堺から京に戻されて切腹して死ぬのですけれども、武士でないのに切腹するのですからね、これは当時の状況から考えると名誉ある死なのです。そういう死に方を利休さんはしているのです。私たちが茶の湯が好きだとか、茶の湯に心が惹かれるという原点は、この千利休の生き方ではないでしょうか。自分が大成した茶の湯も含めて、最後は一切切切を天に任せるという境地だったのです。だから、利休さんは切腹が嫌だ嫌だではなくて、自分が70歳にして死ぬことの意味を感じ取ったのです。ですから、生きていくことの意味を自ら問いかけるということは、とっても大切な茶人の価値観だと思います。

2. 高山右近 日本訣別の書状 忠興に問う「如何に」

次に高山右近の『日本訣別の書状』。これは40年か50年前に永青文庫から見つかった、大発見の書状です。この書状は高山右近が小倉に居る時に、細川忠興に宛てた手紙です。自分は、徳川家康から島流しにあつて、宣教師たちと一緒にルソンに流されようとしているけれども、私の60年間の苦しみ、私の人生を細川忠興さんはどう思う？と問うているのです。それが「如何に」なのです。「いま南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです。いかがなものでしょうか。」なのです。私の人生をあなたはどう思いますか、「如何に」と書き送ったこの手紙は凄くと思います。皆さんが亡くなる前に、皆さんが大好きな人に、「それじゃあ、さようなら、私の人生をあなたはどうだっただと思いませんか」って言えたら凄くですよ。皆さんは、これだけの客観性をもって自分自身の死を迎えられるでしょうかねえ……。『如何に』。千利休にしても、高山右近にしても、こうした人生の終わり方があるのです。二人とも人生の四季の綺麗な終わり方、茶人として見事な終わり方だと思います。そう思いませんか。

3. わたしの茶の湯と日常

次に「わたしの茶の湯と日常」ということを書きました。私の人生の四季ですが、ぼくが16歳の時に、御降誕祭の朝の礼拝で洗礼を受けました。その時は、何も分からずに洗礼を受けました。そして、洗礼を受けてからさまざまなことが分かりました。洗礼を受けてから、ぼくの心には二つの問いがありました。「あなたにとって生きることは何？死ぬことは何？」というものです。この問いは、今でも続いています。

◆茶の湯の四季 [高橋先生のレジュメより]

むすび 茶の湯の日常性と芸術性の春夏秋冬

1. 千利休の遺偈(ゆいげ) 死を見る芸術

人生七十 力困希咄 吾這寶劍 祖佛共殺 堪る我
得具足の一太刀 今此時ぞ天に抛つ
人生70年 えい、えい、えい(忽然と大悟したときに発する声)、この宝剣で祖仏も我も共に断ち切ろうぞ(まさに殺活自在の心境なり)、みずから得具足(えぐそく、上手に使える武器)の一太刀をひっさげて、今まさに、我が身を天に抛(なげう)つ(いまや迷いも何もない心境だ)《『利休の死』小松茂美著/中央公論社》

2. 高山右近 日本訣別の書状 忠興に問う「如何に」

1614年(慶長19年)11月8日、長崎・福田港から高山右近、内藤如安とその家族たちはスペイン宣教師、モレホン神父らと共にマニラに向かって出帆した。その一ヶ月前に細川忠興に宛てて次のような書簡を右近はしたためている。

・小松茂美氏による意識は次の通りである。

「近々、出航いたすことになりました。ところで、このたび一軸の掛物をさしあげます。まことに、どなたに差し上げようかと思案いたしました。やはり、あなた様にこそふさわしいもの、私のほんの志ばかりでございます。〈帰らじと思えば兼ねて(予ねて思えば)梓弓無き数にいる名おぞ留むる)彼(楠木正行)は戦場に向かい、戦死して天下に名を挙げました。が、是(私=高山右近)は、いま南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです。いかがなものでしょうか。60年来の苦もなんのその、いまこそ、ここにお別れがやって参りました。先般来の御心尽くしの御礼は、筆舌につくすことはできません。恐れながら申し上げます。

九月十日 南坊等伯より

羽柴越中守様へ 御取次ぎのほどを。」

(日本暦9月10日は西暦10月13日である。その日から26日後の日本暦10月7日、西暦11月8日に長崎福田港を出航した。)

3. わたしの茶の湯と日常

祝福された死 【黙示録14章13節】

また私は、天からの声がこう言うのを聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである。』と。御魂も言われる。「しかり。その人たちは、その苦勞から解き放たれて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともに歩いて行くからである。」

4. 三浦綾子のことば

「わたくしは死事(しごと)が残されている」

聖書の最後にこういった言葉があるのです。ちょっと読みますね。《また私は、天からの声がこう言うのを聞いた。「書きしるせ。『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。』と。』御魂も言われる。「しかり。その人たちは、その苦勞から解放されて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともにについて行くからである。』》【黙示録14章13節】です。ここに、「今から死ぬ者は幸いだ」という言葉があるのです。この言葉が今のぼくを支えている言葉であり、死に直面しているぼくに対する慰めです。ですから、「祝福された死」というものがあるのだということを、聖書の最後の言葉から感じています。

4. 三浦綾子のことば

ぼくの処に三浦綾子さんという作家の最後の秘書の方がお見えになって、いろいろな話をされる中で、こんな話をしてくださいました。三浦綾子さんが何もできなくなって床に寝ている時に、「実は、わたしには残されている仕事があるのよ。それは死ぬことなのよ」と、おっしゃったそうです。「残された仕事は死ぬこと」つまり「死事(しごと)」だというのは、彼女のユーモアらしいですね。日曜日の夕方にテレビ放映されている「笑点」の生みの親は三浦綾子さんですからね。三浦綾子さんが『氷点』という作品で1千万円をもらったのです。それを見ていた落語家がわれわれは『笑点』という番組を作ろうということで、現在まで続いている番組があるのです。三浦綾子さんが横になって、ご自身の自由が利かなくなった時に、秘書の方に「私にはまだ仕事がある。それは死ぬことだ」とおっしゃったそうです。皆さんにも「死ぬことという死事」が残されています。だから最後までやり遂げましょうよ。

◆「温もり」

きょうのお茶碗も面白かったですよ。器というのはお茶が入って手に持っているところが一番大切なのですね。千利休が茶の湯で求めたものは「温もり」です。千利休が「温もり」を求めたように、ぼく自身も「温もり」を求めているのです。だから、死のギリギリのところまで、「温もり」が感じられない人は寂しすぎると思います。最後まで「温もり」があるような生き方をしてください。そうでなかったら、それまでにやってきたことが意味を失います。



きょうの資料の中で千利休の遺偈がありましたね。利休さんは、随分前からあの遺偈を書いていたのですよ。それを堺から京の家へ戻ることを命じられて、そこで切腹するのですけれども、この遺偈を書いて切腹するときに、利休さんがしたことは何かというと、傍に居た人たちに茶を振る舞ったのです。介錯で自分の首を斬る人にも茶を振る舞い、そこにあった茶道具の茶杓、茶碗などを、これは誰々に、こちらは誰々に差し上げてくださいということをちゃんと書き留めているのです。その書き留めが遺っています。それはどういうことかという、利休さんは「死ぬことは何か」ということを自分で答えているのですよ。自分にとって死ぬことは、すべてを委ねることであり、任せることなのです。自分があれこれすることではないのです。ですから、茶の湯を教えるものとして、いつでも開いているのです。何に対してもです。ですから、今、ぼくが考えていることは、こうした茶碗をいつ誰に委ねようかということです。死に直面している者として、一番大切なことです。「あなたにとって死ぬことは何か」という問い答える大切な意味です。ぼくにとって「死ぬ」ことの意味は、全部を利休さんのように委ねる、任せることです。それが、本当に美しく輝いているぼくの心であるならば、そうありたいですね。

偽物ではなくて、本当の審美眼を養いたいですね。偽りがまん延しているこの世の中で闘わなければならないことは、何が偽りで、何が真実かということを見極める力量を高めることなのでしょうね。そのためには、自分自身の中にある偽りを追い出さなくてはならないですね。自分自身が偽りで麻痺していますからね。ぼくはテレビを見ますが、テレビの世界ってほとんどが偽りですよ。しかも、その偽りがあたかも、あなたを幸せにするよ、楽しいですよ、いいことなんだからっていうメッセージで誘ってくるのですよ。でもそれは、ぼくを亡ぼすのですよ。それと闘っていなかったら、切り捨てなければ、ぼくは利休さんのように茶の湯を愛でることができなくなってしまうのです。だから、たった一服の土の器からいただくお茶に、利休さんはすべての価値を注入していたのです。そして、その原点は「温もり」なのです。人の心は、人の「温もり」を求めているのです。最後までいろいろなことをやってきても、最後の最後に「温もり」を与えてくれる存在がいなかったら、これは寂しいですよ、寂しすぎますよね。

今、あなたからいろいろな感想やご質問をいただきましたが、最後にあなたが言いたかったことは、「温もり」だったと思います。ぜひ、あなたもこの後、「温もり」のある生き方を送ってください。

ぼくは毎朝、自分のためにお濃茶を立てて、暫くしてからお薄をいただくのが習慣になっているのです。そうすると「温もり」をいただくことができるのです。お濃茶は三口半で飲みなさいといわれるのですが、キリスト教の「神様は三位一体(さんみいつたい)」と言いますが、「御父の憐み、御子の贖い、御魂のとりなしに守られていることに感謝」してお濃茶をいただきます。〔完〕

高橋先生の講話には「温もり」が溢れていました。